

報告ダイジェスト

・第16回認定NPO法人ぱれっと 社員総会開催報告	(報告1)
・新人紹介	(報告2)
・鎌倉お泊り会報告	(報告3)
・モンゴル出張報告	(報告4)

報告1 第16回認定NPO法人ぱれっと社員総会開催報告

5月27(土)、渋谷区リフレッシュ氷川にて第16回社員総会が開催されました。当日の出席者77名、委任状提出者223名で、議決権のある会員数414名(5月27日現在)の過半数となり、総会が成立、議長に理事の田口雄一さんが選出され議事が進行しました。

【議案】第1号議案：2016年度事業報告	第4号議案：2017年度事業予算
第2号議案：2016年度会計報告	第5号議案：定款変更の件
第3号議案：2017年度事業目標	

2017年度 就労支援事業活動明細予算書
2017/4/1～2018/3/31
おかし屋ぱれっと/工房ぱれっと

●当日の様子

冒頭、相馬理事長より、開会の挨拶として、移転に関するご支援のお礼と渋谷の街づくりの現況などが報告され、その後定款の手続きに則って議案の審議へと進みました。例年通り、議案書の読み合わせ、決算資料の説明に続き、監事の矢崎芽生さんから監査報告がありました。決算では、ぱれっとビルの建設移転に伴い、収入支出とも大きな金額が動いた一年で、財産に「建物」という新たな項目が追加されていることが説明されました。

なお事業計画の部分で、おかし屋ぱれっとの通所員の工賃が、昨年実績より下回って予算化されていることに質問があり、検討の結果、別表のように、就労支援事業費予算の修正が行なわれましたのでご報告申し上げます。その他の議案につきましては、議案書通りに可決されました。

(事務局長 南山達郎)

生産活動	(円)
科目	合計
【就労支援事業活動収益】	
菓子売上高	25,600,000
就労支援事業活動収益計	25,600,000
【就労支援事業活動費用】	
就労支援事業販売原価	
当期就労支援事業仕入高	
就労支援事業費	24,970,000
就労支援事業明細書	
1.材料費	
材料費	7,000,000
梱包材料費	2,000,000
工房材料費	250,000
当期材料仕入高	9,250,000
計	9,250,000
当期材料費	9,250,000
2.労務費	
労)利用者工賃	10,000,000
労)利用者通勤手当	900,000
労)臨時雇賃金	0
当期労務費	10,900,000
4.経費	
製)福利厚生費	150,000
製)旅費交通費	230,000
製)器具什器費	100,000
製)消耗品費	450,000
製)水道光熱費	950,000
製)燃料費	60,000
製)修繕費	250,000
製)通信運搬費	500,000
製)受注活動費	500,000
製)損害保険料	120,000
製)賃借料	0
製)支払手数料	90,000
製)研修費	50,000
製)租税公課	480,000
製)減価償却費	730,000
製)雑費	160,000
当期経費	4,820,000
当期就労支援総事業費	24,970,000
差引	630,000
積立金取崩額	0
就労支援事業活動増減額	630,000

【修正点】利用者工賃
修正前 9,000,000-
修正後 10,000,000-
※これにより
就労支援事業費総額
も変更となります。

【各事業：2017年度事業目標】**事務局****■スタッフ・ボランティアの育成に注力する**

ぱれっとビルの完成移転に伴い、懸案であった経営基盤は安定に向かい始めています。一方で、新しい事業の立ち上げに伴って、新しい職員が増えたことを受け、今一度ぱれっとの理念の共有や目指すものについてのしっかりとした意見交換や学びの場を設けていこうという声が上がっています。今年度は各セクションを支えて下さるボランティアも含めて、ぱれっとの大きな財産である、『人』に向き合う一年にしていきたいと思えます。

余暇活動支援事業『たまり場ぱれっと』**■楽しむことへの追求を忘れず、挑戦**

良い点は維持しつつも、今までにない新しい企画に挑戦をしたり、さらなる企業や地域の人々とのつながりを創造して、たまり場プログラムの拡充を図っていきます。

■運営体制の改革

運営ボランティアとともに、継続して関わってくれるボランティアの増加や、効率化を図れるような運営体制づくりを推進していきます。また、障がいのある参加者の多くに育まれた主体性・積極性を、多方面で発揮できるような環境づくりも心掛け、内容・体制面双方で刷新した、たまり場ぱれっとを目指します。

障がいのある人たちを対象とした就労支援事業**『おかし屋ぱれっと/工房ぱれっと』**

■『おかし屋ぱれっと』通所員一人ひとりの作業の見直しとスタッフも含めた人材育成に努める

効率よく仕事を進める上で、一人ひとりの作業特性を見極め、支援の在り方をスタッフ間で共有し、人材育成に取り組みます。スタッフには研修の機会を積極的に設け、人間関係も含めた円滑な作業所運営に努めていきます。

■『工房ぱれっと』生産量の安定とその人に合わせた職場環境づくりを目指す：

大量注文に無理なく対応できるよう、ボランティアの拡充や一部の機械化を行ない、量産体制を整えます。限られた空間の中で、通所員一人ひとりが安心して仕事に取り組める環境づくりに取り組みます。



障害者総合支援法に基づく障害者福祉サービス運営事業
『えびす・ぱれっとホーム/しぶや・ぱれっとホーム』

■安定した職員体制づくり

職員やアルバイトの募集並びに体制づくりを通して、入居者の暮らしをサポートすると共に、仕事の仕方を見直し、役割の明確化やシステム構築により効率化を図ります。

■えびす・ぱれっとホームのバリアフリー化

入居者の高齢化や、車いす利用者を始め緊急利用者の多様なニーズに対応するため、建物のバリアフリー化対策が急務となっています。具体化に向けて取り組みます。

■体験型ショートステイの構築に向けて

「生活体験の場」への必要性から誕生したぱれっとの短期入所について、緊急一時保護事業とのすみわけや、生活体験型ショートステイの具体的な仕組みと周知に取組みます。

障がいのある人たちを対象とした国際支援事業
『ぱれっとインターナショナル・ジャパン』(PIJ)

■海外の活動団体とのつながりを深める

昨年に引き続き、海外の活動団体とのつながりを深めます。すでに5月にはモンゴルを訪問、現地の福祉事情を視察するとともに、講演を通して日本の福祉を紹介してきました。9月にはマレーシアのイベント「Warm heARTs」に参加、ペナン、クアラルンプールの2か所でワークショップやデモンストレーションを行なう予定です。

広報啓発事業

■既存の広報手段の見直しと、新たな方法の模索

《ぱれっとつうしん》年間を通して、「渋谷の福祉を考える」をテーマに特集を組みます。職員で担当を分担、問題提起やその解決方法を探ります。

《ホームページ》広報啓発事業の一環として広報動画を作成、ホームページ上での公開も計画していきます。同時に既存のホームページの見直しについても検討します。

《パンフレット》見学者に配布する資料を含め、紙ベースの広報ツールを見直します。また、移転や新規事業がひと段落したことを受け、新しい総合パンフレットの作成に着手します。

『ぱれっとの家 いこっと』

■新規入居者の獲得に向けた広報並びに新運営体制の構築

福祉的側面を持ちながら、新たな暮らし方を社会へ発信し提案する「いこっと」ですが、空き室対策と入居者の獲得は、今後のいこっと存続のために課題解決が急務です。具体的には、広報による情報発信と情報提供、新運営体制の構築と安定に向けて取り組みます。また、ぱれっと職員による体験入居で、いこっとへの理解を深めます。

報告4 モンゴル訪問記

【出張メンバー】

谷口奈保子：ぱれっとインターナショナル・ジャパン (PIJ) 代表

武安倫：えびす・ぱれっとホーム職員

5月1日から1週間、知的障がい児・者の社会参加の現状視察と行政関係者や保護者への講演のためにモンゴルを訪問しました。この訪問は、昨年9月にNPO法人ニンジン(※注)の紹介で、モンゴルから保護者や福祉団体関係者がぱれっとを見学したときに講演の要請があり実現しました。初めてモンゴルを訪問した21年前に比べて障がい者福祉の変化が窺えましたが、特に知的障がい者の分野では、親の会の関係者から、今まさに変わろうとしている力強さを感じました。今後の活動が楽しみです。

(PIJ 代表 谷口奈保子)

●特別支援学校を視察

知的障がい児が通う第63特別支援学校は郊外のゲル地区にありました。学校長から教育方針についてお話を伺うと、知的障がい者の自立や卒業後の労働能力を身に付ける訓練を行ない、社会参加の為の活動に力を注いでいるようでしたが、卒業後の半数は行き場を失い、自宅で保護者と過ごし、デイサービス等に通うことが現状です。実際にいくつかのクラスの授業の様子を見学させて頂きましたが、大変軽度な方が多く、知的障がい者の社会参加の遅れを目の当たりにしました。

●精神保健センターを視察

重度な知的障がい者と精神障がい者の入所施設と日中活動を行なっている施設でした。施設外に出て行なう活動も無く、施設の周りを高い壁で覆っていて、閉鎖的な印象を受けました。施設の広場の一角には、20年程前から行っている共同生活や自立の訓練の場として、グループホームならぬグループ

ゲルが4つ隣接しており、一つのゲルに4人が男女別に入居していて、過去に13人を社会に送り出しているとのことでした。センター院長や他のスタッフのお話を伺うと、現在の支援改革が必要なのだと問題意識を持って活動されていると感じました。

●子供発達センターを訪問

保護者の会が運営しており、ソーシャルワーカーや他の専門家を招き、学校卒



【トランジションプログラムのワークショップ】

業後に行き場のない障がい者の就労移行支援(トランジションプログラム)等を行なっている組織でした。そこでは当事者の社会性を身に付ける為の訓練や、専門的な技術を磨く訓練、他にも保護者の方々に、障がい者の社会参加促進の為の啓発活動等を広げる活動を行っています。プログラムはまだ開始して1年程で、専門家や保護者も障がいの特性についての知識や経験が備わっておらず、個々の尊重を見失っているように思いました。谷口代表のアドバイスをきっかけに、今後当事者の個性を尊重しながら個々の能力を引き出し、当事者の活躍の場を拡大していこうという意識が変わっていかれることを願っています。

●谷口代表の講演を通して

保護者対象の講演は、講演中に何度も拍手が起ったのは、保護者の抱えている

悩みと講演の内容とがまさしく一致していたからだと思います。講演後の質問も多数あり、保護者の表情に鬼気迫るものを感じました。それに比べ、行政対象の講演の反応を見ると、質問も少なく、障がい者の社会参加への関心が低いように感じました。モンゴルの障がい者の家族や、福祉団体関係者が当事者の声を代弁して、行政だけでなく市民にも訴えて、巻き込んでいくことがモンゴルの障がい者福祉の変革の鍵だということを感じました。

●自立生活支援センター

【利用者との懇談】



モンゴル初の身体障がい者の当事者の団体を訪問して、日本で研修の経験があるリーダーから活動の概要を聞かせて頂きました。身体に障がいのある職員が13人おり、年齢層は20代後半～40代前半の若い世代を中心に、とても興味深い活動を積極的に展開している事業所でした。様々なモンゴルの社会問題に取り組みながら、健常者のアルバイトを雇用して身体障がい者のデイサービスを行ない、当事者が技術を学んで車いすの訪問修理に関わったり、車いすの方がモデルのファッションショーも開催していました。知的障がい者の分野とは異なり、身体障がい者の社会参加は当事者自身が率先して立ち上がり、積極的に活動していることから、今後の活躍が楽しみです。

●海外研修を通して感じたこと

モンゴルという異国で様々な人達との交流を通して、先進国からのアドバイスがいかに必要かを実感しました。現地の福祉団体や保護者の方々への谷口代表のアドバイスや自分が働いているグループホームの現場の話に強い関心を持ちながら熱心に耳を傾ける様子に、福祉的視点だけでなく世界とのつながり、そして支援する尊さや、国を超えてたくさんの人々とのつながりを持つことの楽しさを肌で感じました。同時に、自分自身の今後の生き方に関わる学びだったと感じています。将来、何らかの形で障がい者福祉を通して海外のつながりを持ちたいという心の変化がありました。また、日本が抱える社会問題から、現在グループホームの入居者の高齢化や、職員不足、更に今後、虐待や育児放棄を受けた子どもを一時的に受け入れていくとしたらどんな支援が必要なのかを真剣に考えていかなければなりません。そのためにも、途上国だけでなく、先進国の福祉団体とのつながりを作り、定期的に現場同士の情報を共有し、常に視野を広く持ちながら現場に臨むことで、更に世界全体の障がい者福祉の向上や課題改善につながるのではないかと思います。

今回の海外研修は私にとって大変な学びとなり、自分自身の大きな成長につながったと確信しています。

(えびす・ぱれっとホーム 武安 倫)

(※注) NPO法人ニンジン…2003年設立。ニンジンとはモンゴル語で「人道的な」という意味。車椅子や歩行器の寄付、療育専門家の派遣を通して、モンゴルの障がい児者支援を続けている。